リレーコラム 40　　キャリアの積み方－私の場合

留学とチャレンジのすすめ

東北大学小児科　　森谷　邦彦

私は 2015 年から 3 年半、パリネッカー小児病院の Jean-Laurent Casanova 研究室に留学してきました。留学して 2 週間後にパリでテロがありましたが、現在留学されている先生方は、新型コロナウィルスの影響で私よりもいろいろと苦労なされていると思います。恥ずかしながら、人生で強く自分の意志を持って決めたことは、①サッカーをやること②医者になること③小児血液をやること④35 歳までには海外で仕事をすることくらいです。私はいくつかの研究室にメールで apply をして、返事のあった 4 つの研究室のすべてからグラントがあるかどうかを聞かれました。プラハでの国際学会でボスと話をする機会をいただき、その後パリの研究室でプレゼンをして幸運にも採用が決まりました。最初の 1 年は日本からグラントを頂くことができ、その後の 2 年半は EU のグラントで雇用されました。

大学院生時代はマウスを用いた白血病の仕事を行っていましたが、帰国してから臨床をやりながら研究をするとなると、なるべく動物を使わない仕事をしたいと思っていました。幸い iPS 細胞をはじめヒト検体を用いた解析手段は増えており、徹底的にヒト検体にこだわり研究をすることができました。私自身は、真菌特にカンジダに対して易感染を示す患者や、マイコバクテリアに易感染を示す患者家系の解析を進めておりました。帰国後は東北大学小児科の血液・免疫グループで患者さんのケアをしながら、1 つ 1 つの症例を大事に大学院生と研究を進めています。

留学中の苦労を上げればきりがないですが、大学院生時代から 4 年の研究ブランク、英語圏以外への留学による言葉の壁、周りのポスドクとの実力差などにより気持ちが沈む時期もありました。そのような中でも、厳しくも素晴らしい環境で集中して研究できていること、家族が元気で海外生活を楽しめていることの 2 つがあれば十分くらいの気持ちで、あまり欲張らないようにしたら気持ちが楽になり、少しずつ腰をすえて研究を進めることができるようになりました。プライベートでは留学後すぐにフットサルで右膝前十字靭帯を損傷してしまい、研究所フットサルチームでの交流ができなかったのは残念でしたが、ヨーロッパでのサッカー観戦や家族での旅行をいろいろな場所で楽しみました。また第 2 子の女児をパリで無事に出産でき、出生前検査、保険、新生児マススクリーニング、予防接種などに触れられたのは小児科医として勉強になりました。元気なこどもを産んでくれた妻に感謝感謝です。フランスでの研究と子育ての経験は、2020 年の日本小児科学会学術集会の男女共同参画シンポジウムでお話しする機会がありました。

帰国して 1 年半が経ちましたが、いま感じているのはどんな状況、環境であれ、一日一日チャレンジの気持ちを大事にして、モチベーションを高く生活することです。それは患者さんのケア、家族や友人との生活、論文や研究、学生や研修医の先生の指導など全てにおいて言えることと思います。今後、この経験を様々な形で生かすべく精進したいと思うこの頃です。

＜著者略歴＞　森谷　邦彦　もりや　くにひこ

山形県山形市出身

2005 年　山形大学医学部医学科卒業

2012 年　東北大学大学院医学系研究科博士課程修了

2013 年　東北大学大学院医学系研究科　小児病態学分野　助教

2015 年-2019 年　フランス国立衛生医学研究所 U1163 博士研究員

2019 年～　東北大学大学院医学系研究科　小児病態学分野　助教

～男女共同参画推進委員会より～

「チャレンジとモチベーション」

チャレンジとは、「困難ではあるけれど乗り越える意味があるもの」ですが、留学は“チャレンジ”そのものです。しかし、留学以外のチャレンジの実現のためにも、それを可能にする“環境”の整備が必須です。実は、日本で初めて留学した人は女性で、『日本書記』に百済に渡ったと記されています。太古のチャレンジは命がけでしたが、現在でも小児科医（特に女性医師）の夢の実現を妨げる多くの困難が存在します。森谷先生のように、“厳しくも素晴らしい環境”で研究へ邁進され、ご家族（特に奥様）への感謝を実感された留学は、キャリア形成以上の経験です。また、モチベーションを持ち続け人生を開拓できるように、森谷先生のような経験者や将来のパートナーと夢の共有・相互理解を深める事も重要です。男女共同参画推進委員会では、日本小児科学会学術集会で『カフェ企画』を開催し、研究・将来の小児科医などの複数のブースで自由に意見交換ができる場を設けています。本委員会のチャレンジは、皆様とともに、意識の改革や環境や制度の整備を成功させる事だと信じます。